

ミステリ読書案内

2023. 10. 27 発行元

第524号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

最近になって出版された本の中から4冊を紹介する。今回は完全にシリーズものだけになった。しかも、私が毎回欠かさず読んでいた常連作家の作品ばかり。それだけ安心して読めるという本が並んだ。

暑い日の連続・異常気象

私の専門は「地学」で、「気象」関係はそれほど得意ではないものの、データから天気図を書くことぐらいはスムーズにできる。でも、最近の天気を見ていると、地球の気象の状況が加速度的に変化してきていると感じる。

今年の夏の高温は特に目立った特徴である。東日本・北日本は「観測史上最高の…」という表現が繰り返された。「異常気象」、「地球温暖化」がいよいよ迫ってきたのではな

いかと危惧している。熱中症対策は当然のことだが、作物の生育状況にも大きく影響を与えていく。南極・北極などの氷が溶けて海面が上昇する、巨大台風が発生する、砂漠化が進む…。地球全体の危機が迫ってくるかもしれない。

ロシアによるウクライナでの戦争などは「地球・人類を守る」観点から言えば、本当にエネルギーの無駄遣いでしかない。二酸化炭素なども大量発生していることだろう。人類が地球全体の未来を考えて行動を作っていく必要があると思う。

今野敏『遠火 警視庁強行犯係・樋口顕』

8月に幻冬舎から出た本。シリーズ8冊目に当たる。『小説幻冬』に連載されたもの。

今回は奥多摩で発見された女子高校生の殺害事件を担当する。シーツにくるまれた全裸の死体。どこからか運ばれてきてここに遺棄されたものらしい。やがて高校生で運営されているらしいファッションなどの企画集団ポムが浮かび上がってくる。帯には「社会派ミステリー」と書いてあるが、今野敏作品としてはごく通常の流れの話。夜や休日などの高校生・若者の動きをテーマにしているが、家庭環境や学校関連の捜査にあまり触れられていないのがやや不自然。少年事件課の氏家が全面的に捜査協力してくれる。

渡辺裕之『修羅の標的 傭兵代理店・改』

8月に祥伝社文庫から出た本。シリーズ30冊目。ますます現実世界と同時並行の話になってきた。ロシアによるウクライナ侵攻。一年を越え、ウクライナ側が反転攻勢に出ようとする時期。傭兵代理店の藤堂浩志を中心にするリベンジャーズはサポリージャ原発を守るため、極秘の動きを展開していく。ロシア側が原発に爆弾を仕掛けたのか…。明石柊真を中心とするケルベロスのチームも側面から支援をして…。軍事衛星のデータやドローン映像を駆使しての作戦であり、スマートフォンのGPS位置情報も重要な手掛かりになっていく。東京の傭兵代理店も不眠不休で生の情報を送り届ける。ロシアの特殊組織の中心人物グルシャコフの姿を求めて…。

鳴神響一「脳科学捜査官真田夏希

アナザーサイドストーリー」

8月に角川文庫から出た本。シリーズ18冊目。副題の通りで、今回はスピンオフのような形。後半に夏希は出てくるものの、前半は上杉輝久と五条紗里奈の話。上杉は独断専行が過ぎるので根岸分室長に左遷されたようになっている。今は亡き香里奈の妹・紗里奈が神奈川県警鑑識課に辞表を出して行方がわからなくなったと聞き、探しに行くところから話は始まる。北アルプスでの出会いの後、根岸分室に無理やり引き取ることに話をつける。そして、横浜のホテルで起きた毒殺現場に連れて行き、一緒に捜査を始める…。

松岡圭祐「écriture 新人作家・杉浦李奈の推論IX 人の死なないミステリ」

8月に角川文庫から出た本。前回は太宰治の幻の遺書？というテーマだった。今回はそういう文学史に関わる内容ではない。出版社の編集者と作家との関係性を取り上げたものになっている。

ラノベ作家出身の杉浦李奈は事件関りの部分で注目されていたのだが、前作では本屋大賞にノミネートされるくらいになってきた。そのせいか純文学作品の出版で知られている鳳雛社の編集者・岡田から声を掛けられ、『十六夜月』という小説を書き上げた。ところが編集会議で宗武副編集長から結末の書き直しを命じられた。主人公の女性を不治の病にして最後に亡くってしまうストーリーにしるという…。書き直しを拒否した李奈だったが、担当編集者の岡田が宗武と対立してしまい、大ベストセラー『涙よ海になれ』の作者・飯星佑一を巻き込んでの騒動に不本意ながら巻き込まれて行ってしまう。ドタバタの喜劇みたいなやり取りが繰り返された後、宗武が悲劇に向かって突進していくことに…。